

児童期の母子関係が青年期の自我形成に及ぼす影響

—自尊感情 (Self Esteem) と対人不安を中心として—

菅原正和*・伊藤由衣*

(2005年10月31日受理)

I. 問題と目的

個人が「自分はこれでよい」と感じたり自己の価値を見出したりすることは、自我形成にとって不可欠である。日本の青年における Social Skill の極端な低下 (例, 中里・松井, 1997) と対人不安の増大をもたらしている要因は複雑であり単一ではないが、一世代前の家庭における親子関係と現在とは著しく異なり、人間関係の基盤となる子ども時代の親との関係の変化が大きな影響を与えている可能性は否定できない。

中でも、母親の養育態度が子どもの行動や自我形成に及ぼす影響については、これまで多くの研究がなされてきている。しかし、養育態度を測定する際、その形態をどのように分類するかが問題となる。辻岡・山本 (1975a, 1975b) らは、Schaefer (1965a, 1965b) によって作成された CR-PBI の因子分析により、親子関係の主要次元として4種の1次因子 (情緒的支持, 同一化, 統制, 自立性) の存在を明らかにしている。また、「田研式・親子関係診断テスト」(品川・品川, 1958) においては、親の望ましくない養育態度を10の型 (積極拒否・消極拒否・厳格・干渉・不安・溺愛・盲従・期待・矛盾・不一致) に分類しており、この他にも研究者によって分類の仕方が異なるものの、基本的には「拒否-受容」「支配-服従」の2つの主要次元 (辻岡・山本, 1976; 中塚, 1988) に還元されるものが多い。親の養育態度が如何にして子どもの自我形成に影響を与えるかについて、戸田 (1990) は次のように論じている。1つは親の実際の態度 (客観的環境) が直接子どもの行動や自我形成に影響を与える場合で、子どもが自らの行動を統制できない発達段階で、親が様々な言語を用いて社会的ルールに合うように子どもの行動を直接統制することによって子どもの社会的・情緒的発達を促す段階である。次に、認知された親の態度 (主観的環境) が一旦子どもの脳内で情報処理され、意味が付与される段階である。児童期には特にこの主観的環境の影響が大きいと考えられている。

これまでの親子関係の研究を見ると、親の受容的な態度や自立性の尊重が子どもの自尊心 (Self Esteem) を高めること (Grove, 1980; Perterson et al., 1983; Kawash et al., 1985), 安定した情緒の発達を促すこと (Ainsworth et al., 1978; Matas et al., 1978), 子どもの向社会的行動 (Pro-social Behavior) を育てること (Water et al., 1979; Ber-Tal et al., 1980) などが明らかにされている (戸田, 1990)。一方、今日急増している虐待等の問題ある養育行動が及ぼ

* 岩手大学教育学部

** 秋田市教育委員会

す子どもへの悪影響が具体的に研究されてきており、小口（1991）は、親の養育上の問題行動は子どもの自己開示を阻害するとしている。

本研究では、児童期における母親の養育態度が青年期の自我形成に如何なる影響を与えるかを、特に自尊感情と対人不安にターゲットを絞り取り上げる。

自我心理学では、従来自己の能力や価値についての評価的な感情や感覚のことを自尊感情（Self Esteem）と言い、失敗経験と関連付けて度々研究されてきた（Eriksen, 1954; Alper, 1957; Coopersmith, 1960）。自尊感情は、探索行動が著しい幼児期にその行動を養育者により阻止される時（Allport, 1961）、次に初めて学校という社会場面に遭遇する6・7歳の頃（Adler, 1930）、そして identity を確立する青年期（Erikson, 1959）にそれぞれの critical period を迎えるという（井上, 1986）。これらの各発達段階において、最も身近な他者である親の養育行動は、子どもの自尊感情や対人不安の形成に、大きな影響を及ぼしていると考えられることは容易である。

対人不安とは対人場面に遭遇したり、あるいはそれを予測したりすることによって起こる個人の不安反応のことである（嶋野ら, 2004）。小川ら（1979a, 1979b, 1980）は、対人恐怖症者の内界に注目して対人不安を研究している。対人恐怖の感情は、日本人の対人関係様式を非常によく反映しており、そこには独特な自己意識が存在する（林・小川, 1981, 1982）。嶋野ら（2004）は、対人不安を高める働きをもっていると考えられるパーソナリティ特徴として、自分の容姿・行動・発言などに対する他者からの評価に注意を向け重視する傾向である「対人的自己意識」の高さや、他者からの承認を得ることを過剰に期待する「承認欲求」の高さなどを挙げている。松尾・新井（1998）の研究においては、対人的自己意識とほぼ同義である公的自己意識の高さと、対人的自己効力感の低さを合わせもつものが強い対人不安傾向を有することを明らかにしている。対人的自己効力感とは、対人場面において適切な社会的行動を遂行することが、どの程度自分に可能かについての主観的評価のことである。この他にも、他者に嫌われたくない欲求である拒否回避欲求（菅原, 1986）との関連などが報告されている。対人不安との関連が示唆される要因も多岐にわたるが、我国においては他者からの好意を評価基準とし、対人行動を自己評価的にみる傾向が対人不安につながる場合が多い。欧米との比較研究において日本では幼少期の家庭に、対人不安意識を育む様々な要因が多く存在するとされる（小川ら, 1979b, 1980）。

不安は、基底不安（Basic Anxiety）・顕在不安（MAS）・状態一特性不安（STAI）・対人不安等の多くの研究分野が関係するが、発達段階によって質的にも大きく変化していき、一般に中学生・高校生・大学生を比較すると大学生が最も高い不安意識を有している。小石（1995）は、対人不安が中学生に多いことについて、幼児期や児童期に積み上げられた親子関係・仲間関係などの問題が、環境的变化や発達の節目を迎えて表出すると考える。幼少期・児童期の認知的発達とともに、対人不安はエピソード記憶として自我形成に強い影響を与えることがある。

以上のような先行研究を踏まえて、本研究では大学生を対象に、児童期の親子関係＜ここでは母子関係＞が青年期の自尊感情および対人不安に及ぼす影響について分析する。

II. 方 法

＜研究対象＞本研究の調査対象は、国立大学法人 A 大学 4 学部と私立 M 大学の学生 249 名。

＜調査時期＞2004 年 10 月に調査を実施。

<調査方法>無記名で、以下の尺度を修正して実施。①田研式・親子関係診断テスト（児童・生徒用）：

この尺度は、品川・品川（1958）によって作成されたものであるが、項目数が全部で100項目と非常に多く且つ標準化されていない。それ故より正確な data を得るためには他の尺度と同時に実施すると被験者の負担が大きくなるので軽減する必要がある、小口（1991）の縮小版を基本とした。この縮小版は、原尺度で10の型に分類されている negative な養育態度を2つの因子に大別し、項目数も18項目と減少している。原尺度は3件法であるが、本研究では統計上の事由から5件法を採用した。

また、元の尺度は児童・生徒を対象とした尺度であるが、「過去の一定の時期を対象として回答してもらうのであれば年齢制限はない」とされている。本研究は大学生が対象であるため、小学生時代を振り返りその時の母親の養育態度はどうであったか（今現在の自分は、その時の母親の養育態度をどう感じていたか）について解答を求めた。このため、質問項目を大学生にふさわしい文面に修正している。

<例>あぶないあそびはしないようにと、たえずちゅういされますか。

改：危ない遊びはしないようにと、絶えず注意されましたか。

原尺度には、児童・生徒用のほかに両親用があり、養育態度を親側と子どもの側の両側面から測定できるようになっている。しかし、「子どもの行動に影響を与えるのは、客観的な環境ではなく、子ども自身に認知された環境である」とする研究（森下，1981）や、親の調査をする場合には特に注意が必要で「親の養育態度を測定する際、親の側から出てくる回答には、<タテマエ>が多く混在し、<ホンネ>をつかむことが難しい」（繁多，1977）ことが知られており、今回は子どもの側からのみの評価をもとに養育態度を測定することとした。

②自尊感情尺度

Rosenberg（1965）によって作成された Self-Esteem Scale を邦訳（山本ら，1982）したものである。自尊感情の定義は尺度によって若干異なるが、この尺度における自尊感情とは、他者と比較することによって優越感や劣等感を感じるのではなく、自分自身で自己に対する尊重や価値を評定する程度であると考えられている。また、自身を「非常に良い」と感じるのではなく、「これでよい」と感じる程度が自尊感情の高さを示すと考えられており、自尊感情が低いということは自己に対する価値意識を欠いていることを意味する。親子関係診断テストと同様、5件法により回答を求めた。

③対人不安意識尺度

林・小川（1981，1982）によって開発され、もともとは66項目12因子からなる。しかし嶋野ら（2004）の研究において、20年が経過し大幅な改変が必要である事が分かり、因子分析がやり直され39項目5因子構造として使用された。この5因子は、①集団に圧倒される悩み、②自分に満足できない悩み、③対人関係・視線に関する悩み、④自分や他人が気になる悩み、⑤気分が不安定な悩みからなる。本研究では、項目数・因子数や内容から、この39項目5因子が適当であると考えこれを採用した。本研究では「非常にあてはまる」「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「ややあてはまらない」「あてはまらない」「全くあてはまらない」の7件法で回答を求めた。

Ⅲ. 結 果

本調査の回答のうち、記入漏れや大学生以外、および親子関係診断テストにおいて母親以外の養育者について回答したものを除いたところ、有効回答は227名、有効回答率は91.2%であった。

親子関係診断テストについては先行研究において、2因子構造であることが判明しており先行研究に従い、因子数を2に指定して因子分析（主因子法、バリマックス回転）を実施した。その結果、2因子（固有値1以上）が抽出された。それぞれの下位項目は、第1因子には8項目（ $\alpha=0.780$ 、寄与率18.6%）、第2因子には6項目（ $\alpha=0.686$ 、寄与率12.7%）が含まれ、これらを「厳格-拒否」、「過保護-期待」の2つの養育態度の型に分類した（Table 1）。

Table 1 親子関係診断テストの因子分析結果 (n=227)

| | 因子1 | 因子2 | 共通性 |
|---|--------|--------|------|
| 因子1「拒否・厳格」因子 $\alpha=.780$ | | | |
| 1. あなたが話しかけても、「忙しいからね」と言っ て、相手になってくれないことがありましたか。 | .550 | -.077 | .308 |
| 2. あまりあなたに相談しないで、いろいろなことを決めてしま いましたか。 | .608 | -.096 | .378 |
| 5. 同じことをしても、あるときは叱られ、あるときは叱られ ないということがありましたか。 | .592 | -.046 | .340 |
| 6. あなたは、しょっちゅう、小言を言われましたか。 | .614 | -.027 | .190 |
| 9. あなたの友達のことを、やかましく言いましたか。 | .474 | .249 | .352 |
| 11. 外出先とか、人の前では、あなたに対する態度が、家に いる時と違うことがありましたか。 | .560 | .012 | .377 |
| 14. あなたの頼みや、約束を、よく忘れてたり、聞いてくれな かったりしましたか。 | .548 | -.162 | .297 |
| 15. 言われた通りにしなかったら、ひどく叱られましたか。 | .510 | .104 | .287 |
| 因子2「過保護・期待」因子 $\alpha=.686$ | | | |
| 3. あなたの身の周りのことを、家でうるさいほどよく手伝っ てくれましたか。 | .308 | .495 | .392 |
| 4. 友達にいじめられたり、先生に叱られた時、あなたをかばっ てくれましたか。 | -.055 | .432 | .314 |
| 7. 少しの怪我や、病気でも、とても心配して、手当てをし てくれましたか。 | -.076 | .539 | .327 |
| 10. あなたが、頼めば、どんな大変なことでも、喜んでして くれましたか。 | -.065 | .623 | .271 |
| 17. あなたを立派な人にするために、どんなことでもしてい ましたか。 | -.027 | .575 | .332 |
| 18. あなたが、ねだれば、高いものでも買ってくれましたか。 | .005 | .466 | .217 |
| 因子負荷量2乗和 | 2.606 | 1.775 | |
| 寄与率 (%) | 18.615 | 12.681 | |
| 累積寄与率 (%) | 18.615 | 31.296 | |

